



新約聖書 ルカ 13 章

この章の主な内容は概ね以下の通り。

- 1～9 節 群衆への教え
- 10～17 節 安息日の癒し
- 18～21 節 神の国のたとえ
- 22～30 節 狭い門
- 31～35 節 エルサレムを嘆く

たくさんの項目のために焦点を絞りづらい箇所である。

今回は「神の国のたとえ」13章18～22節に着目してみた

そこで、イエスはこう言われた。「神の国は、何に似ているでしょう。何に比べたらよいでしょう。それは、からし種のようなものです。それを取って庭に蒔いたところ、生長して木になり、空の鳥が枝に巣を作りました。」またこう言われた。「神の国を何に比べましょう。

パン種のようなものです。女がパン種を取って、三サトンの粉に混ぜたところ、全体がふくれました。」イエスは、町々村々を次々に教えながら通り、エルサレムへの旅を続けられた。”

●先に「三サトン」について考えてみる。1サトンが約13L。三サトンなら39L。イースト菌の量にもよるが、充分膨らんだところで焼いてパンを作ると約4倍程度の大きさになるから全部で156L。食パンは1斤で約1L程度。ひとり1斤なら156人分以上という計算になる。39Lはかなり多いのでそこから156人分はさほど大きく膨らんだとは思えない。ところがイースト菌の入れる適正な割合は麦全体量の2%らしい。つまりほんのひとつかみくらいでかなり大きくできるということだ。ここではパン種に着目しているから、恐らく「ほのひとつまみ」のことを問題としているのだろう。ところで、パンを作った経験のある方ならわかると思うが、1L足らずの麦粉を捏ねるのにも結構な時間がかかるのだから、39Lの麦粉を全部一人でこねるには相当の手間がかかるはず。果たして一人で156食分を作るとは思えない。恐らく多くの人の手を使うことになるだろう。また、当時のイスラエルでは、こね終わったパン生地の一部を残して、それを発酵し、次に生地をこねるときのパン種にしていた。

●からし種には諸説ある。洋からし(マスタード)の木(カラシナ、正確には草)は北米、中東、地中海に生育し、エジプト時代から香辛料や薬草、あるいは防腐剤としても使われた。うちブラック・マスタードの種は極めて小粒。カラシナ説を否定する立場では、鳥が巣を作れるかが問題にされるが、ギリシャ語のカタスケーノオーが巣を作るという意味でないとする解釈もある。からし種がサルヴァドドラ科の *Salvadora persica* だとする説も唱えられている。(Wikipedia)

●いづれにしても本当に小さな種なのだろう。それが巨木になるらしい。「空の鳥」が意味するところも諸説あるが、雀は比較的人家や人家に近い葉が繁茂する小木に巣を作る。カラスはその体重からも分かるよう小木には巣を作れない。パン種の喩えから察するところ、これは巨木を指しているのではなかろうか。

●この2つの喩えを、イスラエルのほんのひとにぎりの人々が伝え始めた福音が全世界にまで広まったと解釈するのは、余りにもポジティブ過ぎるのではなかろうか。大凡、聖書でいう「パン種」や「木に住む鳥」は宜しくない物の喩えに使われている。

●この箇所を「『教会は規模化していく』が同時に、諸問題が、癌のように蔓延^{はびこ}っていき、教会全体を腐らせていく」との、イエス様の預言と見るできないだろうか。